

Sophocles, *Antigone* 465–468 における 文献学的問題について

平野智晴

οὕτως ἔμοιγε τοῦδε τοῦ μόρου τυχεῖν
παρ' οὐδὲν ἄλγος· ἀλλ' ἂν, εἰ τὸν ἐξ ἐμῆς
μητρὸς θανόντ' ἄθραπτον ἴῃ· σχόμην νέκυν†
κεῖνοις ἂν ἦλγουν· (S. *Ant.* 465–468)*¹

467 ἠνεσχόμεν νέκυν Zo: ἠνεσχόμεν νέκυν a: ἠνεσχόμεν νέκυν LRS: ἠνεσχόμεν
νέκυν V: <ὄντ'> ἠνεσχόμεν *Blaydes*: ἠνεσχυναν κύνες *Semitelos*

本論は、複数の難読箇所を有することで知られる Sophocles, *Antigone* 465–468 について新たな類例を提示し、当該詩行が属する文学的伝統について改めて論ずるものである。

当該箇所におけるテキストの読みの問題について、Jebb は以下の四点に整理している。すなわち：(1) *παρ' οὐδὲν ἄλγος* の解釈；(2) 「母」にだけ言及されていること；(3) *θανόντ'* の位置；(4) L 写本などに伝えられている、意味をなさない *ἠνεσχόμεν* をどう修正するか*²。

(1) について、Jebb は、*ἄλγος* を主格として *ἐστί* を補い *παρ' οὐδὲν* を副詞として扱い、*'a pain in no appreciable degree'* と解釈している*³ が、これは Lloyd-Jones および Wilson をはじめとする他の研究者らによっても支持されている*⁴ (この問題は事実上解決していると思われるので、以降、本論では触れない)。(2) について、Jebb は、「同腹の息子」に類

*¹ 465–468 のテキストについては、主要写本の採用するところに拠った (ただし、465–468 以外の S. のテキストを引用するにあたっては、Lloyd-Jones & Wilson^c に拠った)。また、短剣符†で括った箇所も、特定の写本の読みや特定の研究者の修正読みを選択することをせず、主要写本の間で一致している綴りを書き出すに止めた ('...' は、綴りの一致しない一文字もしくは二文字を表現している)。なお、apparatus criticus は Lloyd-Jones & Wilson^c の情報に拠り、研究者の修正案を筆者の判断で適宜追加もしくは割愛した。

*² Jebb 91 ad 465–468.

*³ id. 91–92 ad 466.

*⁴ Lloyd-Jones & Wilson^a 125 ad 466. 同様の主旨として、cf. Kamerbeek 98 ad 465, 6; Griffith 204 ad 466 etc.

する意味であるとして*5、E. IT 497 *πότερον ἀδελφῶ μητρὸς ἔστον ἐκ μιᾶς*; を引用する*6。無論、彼は、多くの註釈者たちが父親への言及が不可欠であり修正すべきであると主張している、ということを知っている。しかし、それでも、彼は、Seyffert の *ἐμῆς* を *ὀμῆς* に修正する案、Meineke の *μιᾶς* に修正する案を共に退けている*7。(3) について、Jebb は、*τὸν ἐξ ἐμῆς / μητρὸς θανόντ'* と書かれたとき行頭に *μητρὸς θανόντ'* が来ることによって「母に殺された」という意味に取られかねない曖昧さがある、ということを知っている。しかし、それでも、彼は、実際俳優によって朗唱されたとき *μητρὸς* の後に小休止を入れることでこれを回避できる、と反論し*8、これがテキストの修正を正当化する根拠とはならないと主張する*9。(4) について、Jebb は、*ἠνεσχόμεν* を採用する案について、その多くが *νέκυν* を削除し *θανόντ' ἄθραπτον* を様々な方法で変えることになるにも関わらず貧弱な詩行にしかならないことを指摘し、*ἠνεσχόμεν νέκυν* を採用した*10。しかし、Lloyd-Jones および Wilson は、*ἠνεσχόμεν* という例はアッティカ方言に例がないとして退け*11、むしろ Blaydes の (*όντ'*) *ἠνεσχόμεν* を採用し行末の *νέκυν* を削除した*12。

*5 この解釈は適切であるように思われる。なぜなら、この後に続くクレオンとのアゴーンにおいて、502–504 (An.) *καίτοι πόθεν κλέος γ' ἂν εὐκλέεστερον / κατέσχον ἢ τὸν αὐτάδελφον ἐν τάφῳ / τιθείῳα*; 511–513 (An.) *οὐδὲν γὰρ αἰσχρὸν τοὺς ὀμοσπλάγγχους σέβειν.* / (Kr.) *οὐκ οὐκ ὀμαιμος χῶ καταντίον θανόν;* / (An.) *ὀμαιμος ἐκ μιᾶς τε καὶ ταύτου πατρός* と述べられているからである。すなわち、アンティゴネーは、466–467 の *τὸν ἐξ ἐμῆς μητρὸς θανόντ'* について、502–503 においては *τὸν αὐτάδελφον* と言い換えており、また 511–513 においては *τοὺς ὀμοσπλάγγχους* としてからクレオンによる問い返しを経て、エテオクレースを踏まえ直してではあるが、*ἐκ μιᾶς τε καὶ ταύτου πατρός* と言い換えているのである。

*6 この類例の引用は適切でないように思われる。なぜなら、イーフィゲネイアはこの直後に、「生した者」としてではないにせよ「父」にも言及しているからである：499 *σοὶ δ' ὄνομα ποῖον ἔθεθ' ὁ γεννήσας πατήρ;* むしろ、彼女は、舞台登場から、オレステースとピュラデースの身分を質すにあたり、等しく父にも母にも（姉妹にも）何らか言及し続けていると見るべきであろう：472–473 *τίς ἄρα μήτηρ ἢ τεκοῦσ' ὑμᾶς ποτε / πατήρ τ' ἀδελφή τ', εἰ γεγῶσα τυγχάνει;* (E. IT のテキストを引用するにあたっては、J. Diggle, ed., *Euripidis Fabulae Tomus II* (OCT; Oxford 1981) に拠った)。

*7 Jebb 91 ad 465–468 および 92 ad 467.

*8 id.

*9 舞台上の演戯については推測に頼る他なく、その当否を明確に論ずることはできないが、例えば、Kamerbeek の *εἰ τὸν ἐξ ἐμῆς μητρὸς(,) θανόντα(,) ἠνεσχόμεν ἄθραπτον νέκυν (όντα)* という構文理解 (Kamerbeek 98–99 ad 466–68) は、Jebb の理解を間接的に支持しているものと思われる。いずれにせよ、このような処置・理解は、行頭の *μητρὸς* を一語で独立させることで、さらに際立たせることになるであろう (cf. p. 61)。

*10 Jebb 92 ad 467. 同様の見解は、cf. Kamerbeek 98–99 ad 466–68. 他に *ἠνεσχόμεν νέκυν* を採用している例として、cf. Dain 89; Griffith 204 ad 466–8 etc.

*11 *ἠνεσχόμεν* は、(アッティカ方言において通常見られるところの) 二重の加音 *double augment* を持った語形において、第二の加音が省略されそれに加えて *ἀνα-* における語尾音消失 *apocope* が起きている語形であり (Kamerbeek 98–99 ad 466–68)、このような類例は他に見られない。他方で、*ἠνεσχόμεν* は二重の加音のみを持った語形であり、悲劇における類例としては、A. Ag. 905 *ἠνεσχόμεσθα*, S. Ph. 411 *ἠνείχετο* が挙げられる (Lloyd-Jones & Wilson^b 73)。

*12 Lloyd-Jones & Wilson^a 126 ad 467, Lloyd-Jones & Wilson^b 73. なお、彼らは、テキストが壊れた過程とし

このように、当該箇所は複数の問題が絡み合っている*13が、まず、本論では、当該詩行の背景にあると思われる文学的類例について考えたい。

そもそも、466–468におけるアンティゴネーの台詞は、悲劇冒頭で示されるクレオーンの布告を受けてのことである：23–30 Ἐτεοκλέα μέν, ὡς λέγουσι, †σὺν δίκη / χρῆσθεις† δικάια καὶ νόμῳ, κατὰ χθονὸς / ἔκρυψε τοῖς ἔνερθεν ἔντιμον νεκροῖς, / τὸν δ' ἀθλίως θανόντα Πολυνείκους νέκυν / ἀστοῖσί φασιν ἐκκεκρηῦχθαι τὸ μῆ / τάφῳ καλύψαι μηδὲ κωκῦσαι τινα, / ἔαν δ' ἄκλαυτον, ἄταφον, οἰωνοῖς γλυκὺν / θησαυρὸν εἰσορώσι πρὸς χάριν βορᾶς.*14 クレオーンは「布告」という形を取ってはいるが、その主旨は「甲についてはしきたり通り丁重に葬るが、乙については山犬や猛禽に喰われるに任せよう」という死者に対する罵倒を变形したものであり、これはいうまでもなく Hom. *Il.*に見られる表現である。例えば、瀕死のヘクトールに対するアキッレウスの罵倒はその最も強調されたものとされているが、クレオーンの布告との対比的な表現における類似性は明らかである：Hom. *Il.* 22.331–336 Ἐκτορ, ἀτάρ που ἔφησ Πατροκλῆῃ ἔξεναρίζων / σῶς ἔσσεσθ', ἐμὲ δ' οὐδὲν ὀπίζω νοσφιν ἔοντα, / νήπιε· τοῖο δ' ἀνευθεν ἀοσσητῆρ μέγ' ἀμείνων / νηυσὶν ἐπι γλαφυρῆσιν ἐγὼ μετόπισθε λελείμμη, / ὅς τοι γούνατ' ἔλυσα· σὲ μὲν κύνες ἦδ' οἰωνοὶ / ἐλκήσουσ' αἰκῶς, τὸν δὲ κτεριοῦσιν Ἀχαιοί.*15

ここで、クレオーンのこのような性質を有した布告を踏まえて、アンティゴネーが εἰ τὸν ἐξ ἐμῆς / μητρὸς θανόντ' ἄθαπτον ... / κείνοις ἂν ἤλγουν と訴えたときのことを——字義通りに解釈するならば「私の母から生まれたあの方が、死んだというのに、埋葬されないことを（……）、私は苦しんでいるのです」という意味のことを訴えたときのことを——考えてみよう。このとき、Hom. を熟知していた観衆／読者であれば、先程引用したアキッレウスの罵倒の、幾分言い方を変えて繰り返されるその続きを想起したのではないだろうか：*id.* 349–354 οὐδ' εἴ κεν δεκάκις τε καὶ εἰκοσινήριτ' ἄποινα / στήσωσ' ἐνθάδ' ἄγοντες, ὑπόσχωνται δὲ καὶ ἄλλα, / οὐδ' εἴ κέν σ' αὐτὸν χρυσῶ ἐρύσασθαι ἀνάγοι / Δαρδανίδης

て、όντ' が重字脱落 haplography によって脱落した後 νέκυν が挿入された、と想定している。

*13 重要な修正案は、cf. Jebb 92 ad 467. また、重要ではない修正案は、cf. Jebb 252 ad 466 f.

*14 後に、クレオーン自らがアンティゴネーの台詞を踏襲する：194–206 Ἐτεοκλέα μέν, ... / τάφῳ τε κρύψαι καὶ τὰ πάντ' ἐφαγνίσαι / ἂ τοῖς ἀρίστοις ἔρχεται κάτω νεκροῖς· / τὸν δ' αὐ ξύναμιον τοῦδε, Πολυνείκη λέγω, / ... / τοῦτον πόλει τῆδ' ἐκκεκρηκται τάφῳ / μήτε κτερίζω μήτε κωκῦσαι τινα, / ἔαν δ' ἄθαπτον καὶ πρὸς οἰωνῶν δέμας / καὶ πρὸς κυνῶν ἐδεστον αἰκισθέν τ' ἰδεῖν.

*15 「甲についてはしきたり通り丁重に葬るが、乙については山犬や猛禽に喰われるに任せてやる」という対比的な形での罵倒の定型については、他に、cf. Hom. *Il.* 11.452–455 (*Il.* 22 のテキストを引用するにあたっては、D. B. Monro and T. W. Allen, ed., *Homeri Opera Tomus II* (OCT; Oxford 1920) に拠った)。

Πρίαμος· οὐδ' ὡς σέ γε πότνια μήτηρ / ἐνθεμένη λεχέεσσι γοήσεται, ὃν τέκεν αὐτή, / ἀλλὰ κύνες τε καὶ οἰωνοὶ κατὰ πάντα δάσσονται.*16 とりわけ、上記下線部は、嘆き悼むことができない近親者のなかで最もその苦しみが大きい生みの母が事細かに描かれることによって、これに対比される山犬や猛禽による八つ裂きの残酷さが最大限に強調されている。アンティゴネーの台詞もまた「もし母が生きていたら自ら生じた我が子であるがゆえに埋葬できないことを誰よりも苦しんだであろうあの方について、同じ母の子である私もまたこのように埋葬できないことを（……）苦しんでいるのです」という形に敷衍され得るのではないだろうか。

以上を踏まえて、冒頭で挙げた四点の問題の内、(2) τὸν ἐξ ἐμῆς μητρός という表記、(3) 行頭における μητρός θανόντ' の曖昧さについて、私は次のように推論する。すなわち、S. *Ant.* 466–468 と Hom. *Il.* 22.349–354 との間には S. の意図にもとづく対応関係が認められ、ゆえに、アンティゴネーは、アキッレウスの罵倒を踏まえた傲慢冷酷なクレオーンの布告に対して、同じくアキッレウスの罵倒を踏まえて嘆き悼むことが禁じられた近親者の苦しみを最大限に誇示してみせた、と考えられる。そして、上記の対応関係（とりわけ τὸν ἐξ ἐμῆς μητρός と σέ ... ὃν τέκεν αὐτή との対応関係）によって、(2) については、本来ならば「父母を同じくした＝血を分けた」という表現となるべきところ (cf. n. 5)、ἐξ ἐμῆς μητρός θανόντ' 「私の母から生まれたあの方が」という表現になった、と、そして、(3) については、むしろ S. は、行頭に敢えて μητρός θανόντ' と示すことでこれを強調し、観衆／読者に背景にある当該の類例を明確に想起させようとした、と、推論するのである。

また、この考察から、(4) についても、ひとつの可能性を示唆することができる。というのも、S. *Ant.* 466–468 と Hom. *Il.* 22.349–354 を比較したとき、そもそもこの並行関係は、τὸν ... θανόντ' ἄθραπτον ἤ...σχόμην νέκυν† と οὐδ' ὡς σέ ..., ἀλλὰ κύνες τε καὶ οἰωνοὶ ... δάσσονται との間に亘っているように思われるからである。すなわち：

... ἀλλ' ἄν, εἰ τὸν ἐξ ἐμῆς
μητρός θανόντ' ἄθραπτον ἤσχυναν κύνες,
κείνοις ἂν ἤλγουν·

(……) でも、もし私の母から生まれたあの方を、死んだというのに埋葬も

*16 「乙は近親者に嘆かれることなく山犬や猛禽に引き裂かれるであろう／引き裂かれたであろう」という罵倒もしくは悲嘆の定型については、他に、cf. Hom. *Il.* 15.349–351; *id.* 21.123–127; *id.* 22.86–89; *Od.* 24.290–296. とりわけ Hom. *Il.* 22.86–89 におけるヘカペーの、悪い予感についてのほとんどヒステリックな主張について、本文に引用したアキッレウスの言葉がまさに現実のものにしている (cf. N. Richardson, *The Iliad: A Commentary Vol. VI* (Cambridge 1993) 142 ad 352–4).

されずに山犬どもが辱めたとしたら、そのことについて、私は苦しんでしょう。

この ἤσχυναν κύνες という「乱暴な修正案」*17 は、Semitelos によるものである。Jebb によれば、この典拠として *Il.* 22.74–75 ἀλλ' ὅτε δὴ πολίον τε κάρη πολίον τε γένειον / αἰδῶ τ' αἰσχύνωσι κύνες κταμένοιο γέροντος が想定され、テキストが壊れた経緯として κύνες の ες が脱落して νέκυν に、ἤσχυναν の υ が ο へ変化して ἠίσχόμην に、それぞれ読み違えられたことが想定されるという*18。Jebb は、自身の校訂本の初版では ἤσχυναν κύνες を採用したものの、この文脈では動詞の一人称が要求される、という批判の正当性を認め、次版では ἠίσχόμην νέκυν を採用した*19。しかし、上述のように、ここの典拠が *Il.* 22.349–354 であったと考えたとき、この箇所にはやはり (*Il.* 22.74–75 から推論されたのと同じような) 対格目的語+三人称複数動詞+主格複数主語が要求されるのであり、その主語は山犬や猛禽に類するものであったとすべきである。ゆえに、これまで軽んじられてきた Semitelos の修正案ではあるが、私は、これについては上記類例を踏まえ再考する余地があり、Blaydes の〈ὄντ'〉 ἠνεσχόμην、a の ἠίσχόμην νέκυν と同等の重要性を認めるべきである、と考えるのである*20。

(東京大学)

参考文献

- Allen, T. W. ed., *Homeri Opera Tomus IV* (OCT; Oxford 1922).
 Blaydes, F. H. M. ed., *Sophocles Vol. I* (London 1859).
 Brown, A. ed., *Sophocles: Antigone* (Warminster 1987).
 Campbell, L. ed., *Sophocles, Plays and Fragments Vol. I* (Oxford 1876).
 Dain, A. ed., *Sophocle Tome I, Les Trachiniennes – Antigone* (Budé; Paris 1981). [Dain]
 Dawe, R. D. ed., *Sophoclis Tragoediae Tom. II* (Teubner; Leipzig 1979).

*17 Lloyd-Jones & Wilson^a 126 ad 467.

*18 Jebb によって 'Semitelos (1887)' と記された校訂本について筆者未見。以上の記述は、Jebb 92 ad 467 に拠った。

*19 id.

*20 本論は、はじめ、2014 年度に刊行予定であった『東京大学西洋古典学研究室紀要』への投稿原稿として作成された。諸般の事情から刊行は取り止めになったが、この時、紀要編集長葛西康德教授と匿名査読委員からご助言を頂き、これらをもとに推敲を行ったものが、本誌投稿原稿となった。その後も、本誌二名の匿名査読委員から数々の貴重なご助言を頂き、推敲を重ねて、完成稿に至った。作成に関わって下さった全ての方々に、この場を借りて感謝の意を表したい。無論、本稿に残る不備は、筆者の責任に帰するものである。

- Diggle, J., ed., *Euripidis Fabulae Tomus II* (OCT; Oxford 1981).
- Edwards, M. W., *The Iliad: A Commentary Vol. V* (Cambridge 1991).
- Ellendt, F., *Lexicon Sophocleum* (Hildesheim 1958).
- Griffith, M. ed., *Sophocles, Antigone* (Cambridge 1999). [Griffith]
- Heubeck, A., West, S. and Hainsworth, J. B., *A Commentary on Homer's Odyssey Vol. I* (Oxford 1988).
- Jebb, R. C. ed., *Sophocles: Plays, Antigone* (Cambridge 1900. Repr. London 2004). [Jebb]
- Kamerbeek, J. C., ed., *The Plays of Sophocles Part III, The Antigone* (Leiden 1978). [Kamerbeek]
- Knox, B. M. W., *The Heroic Temper* (Berkeley and Los Angeles 1964).
- Lloyd-Jones, H. and Wilson, N. G., *Sophoclea, Studies on the Text of Sophocles* (Oxford 1990). [Lloyd-Jones & Wilson^a]
- Lloyd-Jones, H. and Wilson, N. G., *Sophocles: Second Thoughts* (Göttingen 1997). [Lloyd-Jones & Wilson^b]
- Lloyd-Jones, H. and Wilson, N. G. ed., *Sophoclis Fabulae* (OCT; Oxford 1990). [Lloyd-Jones & Wilson^c]
- Monro, D. B. and Allen, T. W. ed., *Homeri Opera Tomus II* (OCT; Oxford 1920).
- Page, D. L. ed., *Aeschyli Septem Quae Supersunt Tragoedias* (OCT; Oxford 1972).
- Richardson, N., *The Iliad: A Commentary Vol. VI* (Cambridge 1993).
- Russo, J., Fernández-Galiano, M. and Heubeck, A., *A Commentary on Homer's Odyssey Vol. III* (Oxford 1992).
- Segal, C., *The Theme of the Mutilation of the Corpse in the Iliad* (Leiden 1971).
- Winnington-Ingram, R. P., *Sophocles: An Interpretation* (Cambridge 1980).